

# 令和八年度入学試験問題 国語（五十分）

二月一日(午後) 実施

〔注意〕

- 一、試験開始の指示があるまで問題を開いてはいけません。
- 二、問題冊子は14ページあります。試験開始後すぐに確かめてください。
- 三、問題冊子の表紙及び解答用紙に受験番号（算用数字）と氏名をはっきり書いてください。
- 四、デジタル採点をします。解答は解答欄からはみ出さないように、濃くはっきりと記入してください。
- 五、試験終了後、解答用紙のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってください。
- 六、試験中、机の上から物を落としたり、気分が悪くなったり、何か用ができたりした時は、手を挙げて監督の先生に知らせてください。
- 七、字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。

受験番号

氏名

東京女学館中学校



一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学一年生の「私」朋子は、家庭の事情で兵庫県・芦屋の裕福な親戚に一年間預けられた。優美で壮大な洋館に住む親戚一家のなかでも小学六年生の従妹の美奈子（ミーナ）とはとりわけ親しくなった。

① ミーナが私に対し、本当に心を開いてくれたのは、「マッチ箱の箱」を見せてくれた時からではなかったかと思う。もちろんそれ以前も私たちは仲良しだったが、少しずつ関係を密にしてゆく過程で、「マッチ箱の箱」が最終的な扉を開いてくれた気がする。

その秘密を知っているのは、家族友人の中でたった一人私だけだった。あの壮大な芦屋の家に、小さな箱がひっそりと隠されていた事実を共有しているのは、私とミーナ、二人きりだったのだ。

「ねえ、これ、見る？」

ミーナの部屋で一緒に編み物をしている時、ふと彼女が手を止めて言った。

② 「もしよかったら、だけど」

いつもの歯切れのよい自信あふれる口調ではなく、妙に遠慮深かった。ミーナはベッドを壁際に向かってAと押しはじめた。あまりにも重そうだったので、私も手伝った。やがてベッドの下から無数の箱が姿を現した。

どれも両手に載るくらいの小ささだった。模様や形や材質はさまざまで、それらが積み重なってベッドの下をほとんど覆い尽くさんばかりになっていた。これまでもベッドに腰掛けたり寝転がったりして一緒の時間を過ごしたけれど、下にこんなものが隠れているとは気づきもしなかった。何度となくベッドは動かされたらしく、床には傷が残っていた。

石鹸、レターセット、絆創膏、香水、チョコレート、ハンカチ、ボタン……。元々入っていたらしい中身もまたバラエティに富んでいた。その用途に合わせ、当然形状も異なっていた。さぞかし高級な外国製品が入っていたに違いないと思わせるのもあれば、取っておいたところ何の役にも立ちそうにない粗末なものもある。しかしとにかく、どれもすべてが箱だった。

ミーナは不安げに私の反応をうかがっていた。何をたたえるべきなのだろうか。その数か、種類の多様さか、あるいは積み上

げた全体の形か。私には判断できなかった。<sup>③</sup>ポチ子<sup>〔注1〕</sup>と初めて対面した時よりもずっと難しかった。

「どれでも一つ、開けてみていいよ」

ミーナが言った。特別な許可を、私一人のために出すような口ぶりだったので、これらが単なる空き箱でないことはすぐに分かった。

一番手前にある、赤い花柄模様のを一つ手に取った。キャンディーか何かが入っていたのだろう。真ん中に小さな貝殻<sup>かいがら</sup>がくっついていて、それを引っ張ると上蓋<sup>うわふた</sup>が持ち上がった。

キャンディーが入っていたことを思わせるものは何も残っていなかった。パラフィン紙も、お菓子の由来<sup>ゆらい</sup>を説明<sup>しめい</sup>する葉<sup>しおり</sup>も、甘い香りも。ただ底の一つ、マッチ箱が置かれているだけだった。いつもミーナが持ち歩いている、あの、ただのマッチ箱だ。

④「もっと、ちゃんとよう見て」

一緒に箱の中を覗<sup>のぞ</sup>こうとしてミーナは息が掛かるほど近くに顔を寄せてきた。喉<sup>のど</sup>の奥を吹き抜<sup>ぬ</sup>ける風の気配がすぐそばでした。マッチ箱は底に糊<sup>のり</sup>付けされていた。中にマッチ棒が残っているらしく、揺<sup>ゆ</sup>するとがさが音がした。けれどそこは静かな空気に満たされていた。蓋を開けて覗き込んでも揺すっても決して乱されない、<sup>⑤</sup>深海のような静けさだった。

⑥ 私は以前、同級生の男の子に見せてもらった、昆虫<sup>こんちゅう</sup>採集の標本を思い出した。防腐剤<sup>ぼうふざい</sup>を注射され、お菓子の箱にピンで留められたカブトムシやクマゼミやカミキリムシたち。あの箱も静かだった。揺るとやはり、外れた羽やひげががさが音を立たけれど、彼<sup>かれ</sup>らは自分たちが生きているのか死んでいるのか分からないままに、ただじっと息をひそめていた。マッチ箱もそんな昆虫たちのように見えた。

やがてすぐ、箱の内側に何か書かれているのに気づいた。最初は外側の花柄模様が中にも広がっているのかと思ったが、それは花ではなく言葉だった。蓋の裏から側面、底に至るまで、びっしり隙間<sup>すきま</sup>なくミーナの字で、マッチ箱の物語が書き付けられているのだった。

「ここにある箱全部に、マッチが入っているの?」

「うん」

「こうやって仕舞<sup>しま</sup>っておくと、湿気<sup>しき</sup>ないから?」

「ううん。湿気しつげのことは考えたことない」

「米田（注2）さんに見つからないため？」

「私がマッチ好きなのは皆知ってるから、別に隠す必要はないの。ねえ、それよりこれ見て。素晴らしいと思わない？」

私の質問はどれもこれも的外れだったらしい。ミーナはもう待ちきれないというように、キャンディーの箱に納められたマッチを指差した。

新品ではないらしく、角は磨り減り、側葉そくやくにもこすった跡が残っていたが、黄色い地のラベルは色鮮やかだった。ラベルにはシーソーに乗った象の絵が描いてあった。宙を突き刺す牙きばを持った、立派な象だ。草原に設置されたシーソーは、いかにも子供が喜びそうな赤色のペンキで塗られ、実際シーソーに乗った子供たちは皆楽しげに足を揺らしている。もちろん、象が下で、子供たちは上だ。象は一人の子供を鼻で持ち上げ、空に掲げている。その子はオペラ歌手がアンコールの拍手はくしゅを受けるかのよう<sup>⑦</sup>に、得意満面で両手を広げている。子供の胴体に巻き付く鼻には、ほそほそとまばらに毛が生えている。牙の付け根とお腹にはたるみが目立つ。もしかしたら、年老いた象なのかもしれない。象の頭の上には、（注3）〈SAFETY MATCH〉の文字。

「シーソー象よ」

ミーナは言った。

「シーソーに魅入みいられた象なんよ」

ミーナはキャンディーの箱に書かれたシーソー象の物語を朗読してくれた。

象は草原のシーソーで遊ぶ子供たちを、いつもうらやましそうに眺ながめていました。その単純だけれどスリルに富んだ動きにも、ギットン、バツタンという不思議な音の繰り返しにも心を奪われていました。あんなふう<sup>⑧</sup>に勢いよく上がったり下がったりできたら、どんなに気持ちがいいだろう。空に近づいたかと思ったら、地面に着地し、また空へ上ってゆく。きっと耳は軽快けいかいにパタパタとはためくだろう。

ある日象は勇気を出し、仲間に入れてもらえないかと子供たちに頼みました。草原の子供たちは皆優しかったので、すぐさま承知してくれました。

期待に胸をふくらませながら象はシーソーに乗りました。赤い板の上に四本の脚を置きました。思ったより窮屈きゆうくつですが、大丈夫です。

ギットン、バツタンという音が聞こえてくるのを、空が近づいてくるのを、象は待ちました。息を止め、鼻を垂らして待ちました。しかし、何も起こりませんでした。

シーソーの向かい側で子供たちは、申し訳なさそうな、気の毒うづいそうな、何とも言えない顔をしていました。少しでも象が持ち上がらないかと、懸命けんめいにお尻を踏ん張っている子もいましたが、<sup>8</sup>焼け石に水でした。象は地面、子供たちは空。いくら待ってもそのままです。

象は悲しみました。自分が乗った途端とたん、凍りついたように **B** とも動かなくなってしまったのですから、原因は自分以外にないと悟さとりました。実際、そのとおりでした。足元に視線を落とし、地面にめり込んだ赤いシーソーを見つめ、情けない気持ちで一杯になりました。

やがてブランコや砂場や鉄棒てつぼうで遊んでいた子供たちが、様子を見にシーソーの周りに集まってきました。象は自慢じまんの鼻を彼らに巻き付け、シーソーに乗せていきました。皆、歓声を上げます。興奮のあまり、ポーズを決めておどけて見せます。象の鼻に抱き上げられるなど、滅多めったにできる経験ではありません。

一人、また一人とシーソーの上に子供が増えていきました。相変わらずシーソーは動く気配を見せません。窮屈きゆうくつになってきた子供たちは、できるかぎり身体を密着させ、下に落ちないように互いの洋服の端はしを握にぎり締めました。そうしている間にも次々と子供たちはシーソーに乗せられていきました。

<sup>9</sup>次第に彼らは不安になってきました。歓声を上げたりおどけたりする子はいなくなりました。空は自分の頭のすぐ上にあり、反対に地面ははるか遠くにありました。木陰に隠れた子供を捕まえようと象が鼻をのばす時、牙が上を向き、きりつと光りました。

下ろしてほしいと訴うったえるように、子供たちは足を **C** させます。今や自由に動かせるのは、宙に浮かんだ足だけです。シーソーは子供たちであふれ返り、息をするのも苦しいほどです。しかし象はあきらめません。ギットン、バツタンという音が聞こえてくるまで、子供たちをさらに続けます。

もしどこかで赤いシーソーを見かけても、安易に近寄ってはいけません。特に長い年月、片方が地面に食い込んだまま、動いた形跡の見られないシーソーには気をつけた方がいいでしょう。そこには象が乗っています。反対側には、身体を寄せ合い一塊かたまりになった子供たちが乗っています。彼らは宙に浮いたきり、二度と戻もどってこられません。

「おしま」

と言ってミーナは貝殻をつまみ、キャンディーの箱の蓋を閉じた。シーソー象のマッチ箱は再び暗がりの中に戻っていった。

(小川洋子『ミーナの行進』より)

※出題の都合上、一部表記のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

(注1) ポチ子……………芦屋の屋敷の庭で飼っている小型のカバ。

(注2) 米田さん……………芦屋の屋敷に住み込みで働く家政婦。

(注3) 〈SAFETY MATCH〉……………安全なマッチという意味。

問一 

A
---

C
---

 にあてはまる言葉を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア ぴくり      イ ずるずる      ウ ごろり      エ ぶらぶら      オ そろそろ      カ びくびく

問二 ——線部①「ミーナが私に対し、本当に心を開いてくれたのは、マッチ箱の箱〴〵を見せてくれた時からではなかったかと思う」とありますが、なぜ「私」はミーナが心を開いてくれたと思ったのですか。二十五字以内で説明しなさい。

問三 ——線部②「いつもの歯切れのよい自信あふれる口調ではなく、妙みょうに遠慮深えんりよかった」とありますが、なぜミーナはいつもの様子が違ちがったのですか。この理由を本文の内容を踏ふまえて二十字以内で説明しなさい。

問四 — 線部③ 「ポチ子と初めて対面した時よりもずっと難しかった」とありますが、なぜ「難しかった」のですか。理由としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 箱の価値や意味がすぐにはわからず、カバのポチ子を見た時以上にどのように反応すればよいのか戸惑ったため。  
イ たった一匹だったカバのポチ子と違って箱は種類も数も多く、どれから評価すればいいのか困ってしまったため。  
ウ 珍しいカバのポチ子とは違い、ありふれた箱を見せられても即座に「私」は興味を持つことができなかつたため。  
エ 気分屋のミーナの機嫌を損ねないように、カバのポチ子の時よりも大きな反応をする必要があると考えたため。

問五 — 線部④ 「もっと、ちゃんとよう見て」とありますが、ミーナは何を見てほしかったのですか。十五字以内で説明しなさい。

問六 — 線部⑤ 「深海のような静けさだった」とありますが、これはどのような様子を喩えた表現ですか。次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 生き物がまったくいない静かな寂しさがある様子。      イ 誰もいない孤独と穏やかさが漂っている様子。  
ウ まるで変化がなく静かで揺らがない様子。      エ 未知の生命のような神秘性が存在する様子。

問七 — 線部⑥ 「私は以前、同級生の男の子に見せてもらった、昆虫採集の標本を思い出した」とありますが、「マッチ箱」と「昆虫採集の標本」の共通点としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 周りの人に秘密にしている      イ 命を閉じ込めている  
ウ 他人からは興味を持たれないものである      エ 動かすと音がするが静けさを感じる  
オ 大切なことを思い出させる

問八 — 線部⑦「その子はオペラ歌手がアンコールの拍手はくしゅを受けるかのように、得意満面で両手を広げている」とありますが、この絵の様子はミーナの「シーソー象」の物語ではどのように描写びやうしやされていますか。描写されている一文を抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問九 — 線部⑧「焼け石に水」と同じような意味を持つことわざを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 二階から目薬      イ 寝耳ねみみに水      ウ 泣きっ面に蜂はち      エ 鬼おにの目にも涙なみだ      オ 立て板に水

問十 — 線部⑨「次第に彼らかれは不安になってきました」とありますが、何を不安に思ったのですか。十五字以内で説明しなさい。

## 二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

### 《 1 》

どのような口調で、どういう顔でしゃべっているか。そのような付加情報を動画によって気軽に何万人もの人々に伝えることができるようになったのは、情報技術のおかげです。

昔からテレビはありました。Ⅰ テレビはあくまでも演出された空間でした。『朝まで生テレビ!』のような例外はありましたが、ふつうの討論番組はだいたい台本どおりの話をしていただけです。

報道番組や討論番組からは人間性が伝わってきません。逆にワイドショーは人間性は伝えているかもしれませんが、議論になっていません。内容がある議論をしつつ、人間性も伝わるような長時間の動画をだれもが安価に発信できるようになったことは、言論のありかたを変える革命になると思います。

訂正する力は身体と深く関係しています。Ⅱ、「いま言ったのはそういう意味ではなくて」という対話中の訂正が、なぜ受け入れられるのでしょうか。

日常的にみな行っている行為ですが、考えてみればそれはすごいことです。訂正は文字だけでは実行しにくい。なぜならば、文字だけで「さっき言ったのはそういう意味ではなくて」といった自己否定を繰り返していたら、単に支離滅裂な文章になってしまうからです。

でも、ぼくたちは日常の会話ではそういう訂正を平気でなんどもやります。なぜそんなことが可能かというと、そもそもぼくたちはしゃべっているとき、じつは同じ言葉を同じ意味で使っているとはかぎらず、相手の顔や反応を見ながらどんどん意味を変えていつているからです。そしてその前提をたがいにわかっている。

だから、「前後の流れからある言葉を選んでしまっていたけれど、それはさっきいい言葉が思い浮かばなかっただけで、本当はこのように言ったほうがいいのだ」という訂正ができる。言葉の外部への信頼感があるからこそ、言葉を訂正することができるのです。

次章で説明するように、これを哲学的に理論化すると、(注1) ウイトゲンシュタインの言語ゲーム論やバフチンのポリフォニー論と



2023年の4月、兵庫県芦屋市長選挙で26歳の青年、高島峻輔たかしまりようすけさんが勝利し、広く注目を集めました。

一部で報道されましたが、勝利の背景には外見のコントロール⑦がありました。高島さんは有名な選挙プランナーのアドバイザーを受けて、前髪を左右に分け、額を露出ろしゅつさせることで成熟を演出したそうです。眼鏡も外し、イメージを大きく変えました。その戦略があたったわけです。

日本だけの話ではありません。翌5月に行われたタイの総選挙では、前進党という革新派かくしんの野党が躍進やくしんを遂げました。党首がどんなひとかを見ると、魅力的な若い男性です。香港の民主化運動（雨傘運動）で活躍した学生指導者の女性も容姿に恵まれていました。日本ではアイドル的に消費する論評まで出ていたほどです。動画の時代は、こういうルッキズムが前面に出てくる時代でもあります。

そういう時代にどう対応するか。人間はくだらない情報に弱いんだということを、つねに意識しておくことが大事だと思います。人間が外見に弱いのは変わらない。できるのは、「人間は外見に騙だまされやすい、気をつける」というメッセージをきちんと教えておくことです。これは小学校や中学校などで教えてもいい。

人間は弱い生き物です。感情で動かされ、判断をまちがう。エビデンスを積み上げ、理性的に議論すれば「正しい」結論に到達できるというのは幻想にすぎません。人間は信じたいものを信じる。動画とSNSの時代にはその傾向がますます強くなります。ポストトゥルース注3や陰謀論注4の問題です。

**IV** 訂正する力が必要なのです。人間は弱い。まちがえる。できるのはそのまちがいを直すことだけです。「あのひとはやっぱり外見だけだった、騙だまされていた」と反省することが大事であって、そこでうまく訂正できないと、どんどんポストトゥルースの深みに嵌はまっていきます。

（東浩紀『訂正する力』より）

※出題の都合上、一部表記のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

(注1) ウイトゲンシユタインの言語ゲーム論やバフチンのポリフォニー論

……………ウイトゲンシユタインやバフチンなどの思想家による言語に関する理論のこと。

(注2) エビデンス……………主張や結論を裏付けるための証拠や根拠。

(注3) ポストトウルース……………客観的事実よりも感情的・個人的な意見のほうがより強い影響力をもつ状況のこと。

(注4) 陰謀論……………ある出来事について一般に理解されている事実や背景とは別に、何らかの謀略の存在を主張する意見。

問一 本文中の I ～ IV に入る語句として、もっとも適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、記号はそれぞれ一度だけ用いることとします。

ア つまり      イ そもそも      ウ けれども      エ なぜならば      オ だからこそ      カ もちろん

問二 ——線部①「言葉の外部への信頼感」とありますが、「外部」とはどのような部分ですか。本文から八字以内でそのまま抜き出して答えなさい。

問三 ——線部②「対話というのが『そういうもの』だというのはだれでも知っている」とありますが、「『そういうもの』」とは、どのようなものですか。第① 1 段落の内容に即して二十字以内で答えなさい。

問四 ——線部③「訂正する力にも向きません」とありますが、SNSなどの文字だけの空間で訂正しにくいのはなぜですか。その理由を述べた一文を探し、最初の五字をそのまま抜き出して答えなさい。

問五 — 線部④「日本の硬直した言論空間」とありますが、どのような空間ですか。その説明としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 互いの動きを警戒し合う空間
- イ 想定したことしか起こらない空間
- ウ 緊張で空気が張り詰めている空間
- エ 発言者が固定された空間

問六 文中の A 〜 C にあてはまる語の組み合わせとしてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア A 肯定 B 合理 C 一般
- イ A 否定 B 非科学 C 一般
- ウ A 否定 B 合理 C 例外
- エ A 否定 B 非科学 C 例外

問七 — 線部⑤「科学者の言葉は言わば修行僧の言葉です」とありますが、「修行僧の言葉」の説明としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 豊かな感受性を持つ言葉
- イ 厳格に制約された言葉
- ウ 宗教的で奥深い言葉
- エ 道徳的で正しい言葉

問八 — 線部⑥「科学者のほうも仕事以外ではふつうの人間のはずです」とありますが、ここでの「ふつうの人間」とは、どのような人間ですか。「〜」をする人間」につながるように、本文から九字でそのまま抜き出して答えなさい。

問九 — 線部⑦「外見のコントロール」とありますが、選挙で勝つためにこうしたのはなぜですか。十五字以内で答えなさい。

問十 筆者が「訂正する力」が必要だと考える理由としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間は外見や印象に惑わされ事実より感情を優先してしまい、誤った判断をしてしまう危険があるから。

イ 対話では訂正を繰り返すことによって、活き活きとしたやり取りが可能になり、相手に信頼感を与えることができるから。

ウ SNSの文字によるやり取りは訂正しにくいいため、訂正する力を養うことで誤解を解消することができるから。

エ 科学者のように訂正を重ねて真理を明らかにしていくやり方が、感情に左右されやすい人間には適しているから。

三 次の短文中の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1 小学校のオンシと会う。
- 2 サイナンに襲おそわれる。
- 3 それはもはやカコの話だ。
- 4 彼女の意見をサイヨウする。
- 5 時代のチヨウリュウを読む。
- 6 不用品はシヨブンした。
- 7 友人とドウメイを組む。
- 8 花壇かだんの雑草をノゾく。
- 9 先生にケイイを表す。
- 10 作戦の失敗をセめる。







